

相手の気持ちを想像するのが介護 介護の仕事をとおして人を育てたい

奥平幹也氏

株式会社介護コネクション代表取締役
ミライ塾塾長



おくだいら・みきなり●1974年沖縄県生まれ。早稲田大学人間科学部スポーツ科学科(現スポーツ科学部)卒。不動産コンサルティング会社を経て、2012年に株式会社介護コネクション設立。2015年からミライ塾第1期生スタート。ミライ塾の取り組みは、NHKや新聞等で数多く紹介されている。

自力で進学する学生をサポート 新聞奨学生の経験がきっかけに

——最初に、ミライ塾について教えてください。
奥平：ミライ塾は、経済的事情で進学が難しい学生さんの進学支援プログラムです。介護現場で働くことで、自分の力で進学できるようにサポートしています。2019年3月現在で24名が在籍しています。

ミライ塾は、経済的支援だけでなく、“塾”と名乗っているように、人材育成を目的にしており、自分で考えて行動できる自立した人を育てたい…そういう思いから「社会人基礎力」と「やり抜く力」をもった人材育成をめざしています。

取り組みを始めたきっかけは、私も進学時に同様の課題を抱えていたことにあります。

私は全国的にも貧困率の高い沖縄県出身です。4人きょうだいで、両親からは「大学進学のお金

は負担できないし、進学するなら地元はだめ」と言われていました。親の方針もあったと思います。

先に上京した兄が、新聞奨学生をしていたので、私も当然のように新聞奨学生として大学へ進学し、卒業しました。

学生時代は、朝は3時前に起きて、チラシ広告を折り込み、朝刊配達に行きます。6時頃に新聞を配り終えたら、準備をして大学へ行き、3限ぐらゐまで授業を受け、すぐに帰って夕刊を配る毎日でした。こういう話をすると、「大変そう」と思われるかもしれませんが、慣れてしまえば、気持ちに余裕もできるし、いかに早く新聞を配れるか考えたり、自分なりに楽しみながら取り組みました。

他にもラーメン店でアルバイトをしていたので、多い時期は月に20万円くらいお小遣いがありました。当時は、宵越しの銭を持たない主義だったので、猫を飼ったり、ブランドの洋服を買まくったり、いまよりもいい生活をしていましたね(笑)。

大学卒業後は、不動産コンサルティング会社に就職しました。2005年頃から、介護系の不動産投資ファンドの仕事で、介護施設に投資する際の運営や建物の違法性などの調査等に関わっていました。それで介護保険制度の勉強をしたり、全国を飛び回り、たくさんの介護施設を見てきました。

仕事を続けるなかで、高齢者領域は解決しなければならぬ社会的課題が多いと感じ、何か自分でできることはないかと考え始めました。介護人材不足や介護離職も少しずつ問題になってきた頃です。

一方で、貧困による進学問題や奨学金の返済問題も社会問題化しつつありました。調べるうちに、既存の奨学金制度にはいろいろと課題があることがわかりました。例えば、最もメジャーな奨学金制度である日本学生支援機構(以下、JASSO)には、2つ課題があります。1つは、

入口の問題です。最初の奨学金が振り込まれるのが6月頃なので、大学等への合格後の入学金等の支払いに間に合わないのです。経済的に多少余裕がある家庭であれば、学資保険に入っていたり、教育ローンを借りることもできるでしょう。しかし、親の与信がない家庭では、教育ローンが借りられないケースも少なくありません。

もう1つは出口の問題です。学生さんは奨学金によって、何百万円も借金を背負うこととなります。それが卒業後に返せなくなり、自己破産するケースがニュースにもなりました。

最近では、給付型の奨学金もありますが、そこには一定の成績が求められます。しかし、経済的に厳しい家庭では、教育環境が整っていないことも多く、教育水準が低い傾向にあります。

こういった理由から、進学したくても進学できない学生さんはそれなりの数存在します。だからこそ、こういった支援制度からこぼれてしまう子どもたちも受け止められる進学支援プログラムをつくりたかった。

ミライ塾は、そういった思いとこれまで自分が経験してきたこと、できることをかたちにしたものです。2015年に第1期生をスタートしました。

介護の経験は超高齢社会で武器に 高齢者のことがみえるようになる

——入塾の流れについて教えてください。また、若い人が介護の仕事をする意義についてどうお考えですか。

奥平：簡単に説明すると、進学を希望する学生さんと面談し、どういう支援ができるかを検討します。ミライ塾が支援するのは、「本人の進学したい気持ちや覚悟」であって、家庭環境や親の与信等はあまり重視していません。また、かわいそうだから支援するというスタンスでもありません。本気でがんばる子どもたちを、僕らも覚悟をもって支援する。それが基本のスタンスです。

奨学金アドバイザーの方とも連携しながら、ミライ塾ありきではなく、その学生さんにとってより良い他の方法があれば、そちらを提案しています。

進学先の場所や住まい等を考慮しながら、受け入れ先を検討し、面談後に確定します。学生さんには、受け入れ候補の施設で半日以上の体験をしてもらいます。特に違和感がなければ、受け入れ先の条件に応じて、介護職員初任者研修を修了し、勤務をスタートします。皆さん、初めは介護施設を昔の病院のようなところだと想像しているようですが、見学や体験をしてみると、「おもしろそう」「イメージが変わった」と言います。

勤務先では、介護の仕事に従事していますが、介護の専門家を育てたいわけではありません。「介護の経験者」を育てたいのです。

超高齢社会のいま、高齢者や介護の領域に参入していない業界はないでしょう。そういう意味で、就職の際に介護の経験は武器になります。

国が推し進める地域包括ケアシステムにも寄与すると思っています。

塾生たちは、これまで街を歩いていて、高齢者が目に入ることはなかったけれど、介護を経験したことで、高齢者が見えるようになったと口々に言います。介護を経験したいのなら、街で困っている高齢者がいたら、気づくことや声をかけることができるし、専門家につながりこともできます。自分自身についても、将来家族介護に直面しても、精神的、肉体的な負担が大幅に軽減するのではないのでしょうか。

また、それだけではなく、介護の仕事をおして社会教育ができると思っています。

社会に出て大事な能力の1つに、コミュニケーション力があります。しかし、「俺ってコミュニケーション力が高いんだよね」と言っている若者に限って、会社側からの評価が低いことがよくあります。コミュニケーションは双方向で成り立

つもので、相手の気持ちを想像できなければ一方通行になってしまう。例えば、上司が飲みに誘っても、「自分はいいです」と断るのもそう。上司の立場に立って考えれば、お金の余裕がないなかで、部下をねぎらうために誘っているのかもしれませんが——このように、相手の気持ちを想像することができていなければ、それはきちんとしたコミュニケーションとはいえません。

私自身も介護の現場で働いています。現在は、週2回ほど深夜勤に入っていますが、実際に介護の仕事には、この想像する力が常に求められていると感じています。

学生さんとの面談時に、何に一番抵抗がありますかと聞くと、そのほとんどが「排泄ケア」と言います。そんなときは「おむつ交換をしているあなたの嫌だなあという気持ちと、あなたにおむつ交換をされている高齢者の方の嫌だなあという気持ちはどっちが大きいと思う？」と聞いてみると、ほとんどの学生さんが、ほかの誰かにおむつ交換をされている自分を想像し、はっとしたように「されるほうが嫌ですね」と即答します。そこに気づければ、相手のストレスを少しでも和らげようという視点が加わり、接し方が変わると言います。そのとき初めて、介護は作業ではなくなります。これは介護の仕事全般にいえることだと思います。

介護の仕事は、入口の段階でその入り方を間違えてしまうと、ただの作業になってしまい、一気につまらなくなります。虐待にもつながりかねない。逆に相手の気持ちを想像することから始めていくと、一気に楽しくなると思います。

さらにいうと、介護の現場ではたくさんのお会いを楽しめます。私自身も、著名なカメラマンや著名な漫画家のご夫人、青果店の看板娘の方などに会いました。皆、それぞれに人生の物語があり、認知症になっても、それは変わりません。そんな生き様や死に様を見せつけられたとき、自

分の生き方についてとても考えさせられました。

このような経験をしているので、学生さんとの面談のときには、介護の現場での出会いや入り方について話しています。仕事なので、当然楽しいことばかりではありませんが、介護の仕事を嫌いになった塾生はいまのところいません。

◆受け入れ施設も人を育てる意識で 老健施設はやりがいが見えやすい

——受け入れ施設の役割も人材育成になるので
すか。

奥平：ミライ塾では、入学前に必要となる学費の貸付を支援していますが、それは受け入れ先の法人様に支援していただいています。並行して、JASSOの奨学金を申し込んでもらい、アルバイト就労によって法人様へ返済し、完済後は、JASSOへの返済分として貯金し、卒業時の返済に充てるという仕組みです。実家暮らしだと完済できることも多いですが、ゼロにすることよりも、できる限り残さないことをめざしています。

入口での貸付は、受け入れ事業者にとってはハードルが高いものだと思いますが、これまで貸し倒れは1件もありません。貸し倒れのリスクを小さくするためにJASSOを併用し、お金の管理についてはミライ塾でもサポートしています。

実は受け入れ事業者に貸付をしていただくことは、1つのフィルターになっています。

というのも、ミライ塾は介護の人材不足を補うために介護の仕事を勧めているわけではありません。あくまで、介護の仕事をとおした人材育成を目的に取り組んでいます。受け入れに関しては、その思いを共有してくださる法人様であることが前提となります。

もちろん、人材確保としてのメリットもあると思います。働き方はそれぞれですが、塾生はフル夜勤に週2日入るというシフトが最も多く、実質的には週4日働いていることとなります。



大学生の場合、4年間という限られた期間ですが、その間しっかり働いてくれるということも、受け入れ施設には大きなメリットとして感じています。

——老健施設へのメッセージと今後の展望についてお聞かせください。

奥平：受け入れ法人様にも老健施設を運営している所もあるのですが、いまのところ立地条件が合わず老健施設で働いている塾生はいません。

ただ、老健施設は今後もっと広げていきたいと思っています。理由としては、理学療法士や看護師をめざしている塾生もいますし、やはり在宅復帰をめざしている施設なので、やりがいが見えやすい。もちろん、特養のように最後まで関わることが向いている塾生もいますが、自分が関わっている利用者が「在宅復帰できた!」ということにやりがいを感じる塾生もいると思います。

私としては、塾生は、親に学費を出してもらっている学生よりも精神的には一段上にいると思っています。彼らには自信をもって取り組んでもらいたい。そのためにも、松下政経塾のように、ミライ塾出身というだけで「すごい!」と思ってもらえるように、取り組んでいければと思っています。その第一歩として、企業に対して、ミライ塾生の就職の推薦枠をとるのが、当面の目標です。——どうもありがとうございました。